		低栄養			日本	ビリテーションが必要であることが示唆された	稲葉 繁：老年歯科医学 19巻3号 Page161-167(2004.12)	2005119344
		アルブミン						
14	菊谷 武	低栄養	介護老人福祉施設	横断		要介護高齢者の低栄養状態が高頻度に見られ,低栄養の評価には身体計測が有用であることが示唆された.また,低栄養の改善には口腔機能,特に嚥下機能を考慮した取り組みが必須であることが示された	某介護老人福祉施設利用者にみられた低栄養について　血清アルブミンおよび身体計測による評価：菊谷 武, 榎本 麗子, 小柳津 馨, 福井 智子, 児玉 実穂, 西脇 恵子, 田村 文誉, 稲葉 繁, 丸山 たみ：老年歯科医学 19巻2号 Page110-115(2004.09)	2005028665
		身体状況	104名	血液検査	日本			
		喫食率		口腔診査				
15	菊谷 武	摂食嚥下	介護老人福祉施設	縦断		食環境整備や食事の介助技術向上による低栄養改善の試みを行った。調査においてもBMIと身体機能,認知機能や嚥下機能との間に関連が認められた.義歯使用者は介入によって有意に改善した,適正な食事介助法によって嚥下機能が低下している者でも栄養改善が可能と思われた	介護老人福祉施設における利用者の口腔機能が栄養改善に与える影響：菊谷 武, 西脇 恵子, 稲葉 繁, 石田 雅彦, 吉田 雅昭, 米山 武義, 勝又 徳昭, 渡辺 泰雄, 太田 昭二, 日本老年医学会雑誌 41巻4号 Page396-401(2004.07)	2005016804
		栄養改善	38.名		日本			
		食環境整備						
16	小宮山 貴将	かかりつけ歯科医	70歳以上	コホート		かかりつけ歯科医がない群の要介護認定累積発生率は有意に上昇した。Cox 比例ハザ	地域高齢者におけるかかりつけ歯科医の有無と要介護認定に関する	2014209914

		地域高齢者	832 人	前向き 3 年	日本	ード分析において，かかりつけ歯科医なしは要介護認定と独立した関連を有した。一方，受診動機および最終受診の時期は，いずれも要介護認定との関 連を認めなかった。 かかりつけ歯科医の有無は，疾患既往，心身機能，社会的要因，生活習慣，口腔状態 と独立して要介護認定と関連しており，かかりつけ歯科医が介護予防に貢献しているこ とが示唆された	コホート研究　鶴ヶ谷プロジェクト：小宮山 貴将，大井 孝，三好 慶忠，坪井 明人，服部 佳功，遠又 靖丈，柿崎 真沙子，辻 一郎，渡邉 誠： 老年歯科医学 (0914-3866)28 巻 4 号 Page337-344(2014.03)	
		要介護認定						
17	kiwako Okada	アルブミン	200 人	横断	日本	咀嚼能力と体重、MAC、歯科状態、物理的および認知機能、および抑うつ状態との間で相関関係あり。血清アルブミンの濃度は、咀嚼能力、身体測定値とよく相関。咀嚼サイクル、歯科状態、体重及び MAC が咀嚼能力の予測因子で、年齢、能力、握力と性別　咀嚼能力は血清アルブミン濃度の予測因子です。	Association between masticatory performance and anthropometric measurements and nutritional status in the elderly. Okada K1, Enoki H, Izawa S, Iguchi A, Kuzuya M. GG Int. 2010 Jan;10(1):56-63.	
		咀嚼能力	76.6 歳					10.1111/j.1447-0594.2009.00560.x.
		栄養						
18	Yasunori Sumi	口腔ケア	53 人	縦断		口腔ケア群では、有意な減少は介入の開始から終了までのすべての指標で見られなかったが、対照群では今年の終わりに、すべ	Oral care help to maintain nutritional status in frail older people. Sumi Y1, Ozawa N, Miura H,	
		栄養状態	施設入所	介入　週 3　1 年	日本			10.1016/j.archger.

		要介護老人	83.2 歳			ての指標において統計的に有意な減少がありました。これらの結果は、口腔ケアの介入だけでは注意が必要高齢者の栄養状態を維持するのに役立つことができることを示唆しています。連続口腔ケアの実施は、高齢者に栄養状態を維持する効果がありそう。	Michiwaki Y, Umemura O. Arch Gerontol Geriatr. 2010 Sep-Oct;51(2):125-8. d2009.09.038. Epub 2009 Nov 4.	
19		口腔ケア	138 人	縦断　アンケート		訓練後褥瘡と嚥下障害に関するアンケート結果は、定量的に向上。 栄養失調や嚥下障害の危険因子である　臼歯の損失、無唾液、カンジダは滞在型施設の評価では改善傾向だった。トレーニングは、体重減少、低食物摂取を相殺する。	Efficiency at the resident's level of the NABUCCOD nutrition and oral health care training program in nursing homes. : Poisson P1, Barberger-Gateau P2, Tulon A3, Campos S4, Dupuis V5, Bourdel-Marchasson I6. J Am Med Dir Assoc. 2014 Apr;15(4):290-5.	
	Philippe Poisson	ナーシングホーム	施設入所	スタッフ教育に介入	フランス			10.1016/j.jamda.2013.11.005.
		ＱＯＬ		6ヵ月～8か月後				
20	山内 知子	栄養評価	６５歳以上	横断　アンケート		自己評価による「噛めない群」は「普通群」と比較して、残存歯数は有意に少なく、咀嚼力が有意に低く、摂取エネルギー量が有意に少なく、炭水化物エネルギー比が有意に高い	高齢者の咀嚼能力と食事摂取状況の関連 山内 知子, 小出 あつみ： 名古屋女子大学紀要(家政・自然編)(0915-3098)54 号 Page89-98(2008.03)	
		咀嚼	地域在住	咬合力計	日本			2008286114
		地域在住	44 名					

21	田中光	栄養評価	平均年齢 63.6 歳	横断		総義歯群は総エネルギー摂取量,蛋白質摂取量,脂質摂取量,血清アルブミンが 20 本以上群に比べて有意に低下していた.高齢者に認められる低アルブミン血症には,歯欠損,総義歯による咀嚼能力の低下が大きく関与していると考えられた	咀嚼と栄養　特に食事摂取に及ぼす影響に関して 田中 光, 中村 光男, 管 静芝, 松本 敦史, 志津野 江里, 松橋 有紀, 柳町 幸, 丹藤 雄介, 小川 吉司, 田村 綾女, 須田 俊宏, 平野 聖治, 澤田 あゆみ, 小川 知成： 消化と吸収 (0389-3626)28 巻 2 号 Page54-59(2006.06)	
		アルブミン	379 人 成人		日本			2006269141
		咀嚼						
22	秋野 憲一	栄養摂取量	無作為抽出	横断		自立した高齢者においては、歯牙欠損が放置され、適切な補綴処置がなされていない者ほど、総エネルギー摂取量が低かった。したがって、歯科治療による咀嚼能力の改善が低栄養のリスクを減少させる可能性が示唆された。	自立高齢者における歯牙欠損部の放置と栄養摂取状況との関連性： 秋野 憲一, 相田 潤, 本多 丘人, 森田 学： 北海道歯学雑誌 (0914-7063)29 巻 2 号 Page159-168(2008.12)	
		栄養障害	59 地区 1460 世帯	食事記録法	日本			2009082485
		咀嚼障害	65 歳以上自立高齢者					
23		栄養支援	要介護高齢者　58 名	縦断　介入		摂食支援カンファレンスを開催し、ケアプランを立案、実施することで、低栄養リスクの改善を目的とした取り組みを行った。摂食支援カンファレンスはひと月に 1 回開催され、施設のケアワーカー、相談員、看	介護老人福祉施設における栄養支援　摂食支援カンファレンスの実施を通じて：菊谷 武, 高橋 賢晃, 福井 智子, 片桐 陽香, 戸原 雄, 田村 文誉, 青木 徳久, 桐ヶ久保	
	菊谷武	摂食支援	リスクで 3 群	6 ヶ月 月一	日本			2008185219

		カンファレンス				護師、管理栄養士と地域の歯科医師会より派遣された歯科医師、歯科衛生士歯科医師が基本メンバーとなった。介入時には、栄養障害高リスクであった入居者が、介入後には全て低リスクに改善した。	光弘, 小山 理, 腰原 偉旦： 老年歯科医学 (0914-3866)22 巻 4 号 Page371-376(2008.03)	
24		アルブミン	自立高齢者 315 名	横断		前期高齢者の男性では、BMI および血清アルブミン値とも自己評価咀嚼能力の良好群あるいは概良群に比べ、不良群で有意に低下していた。女性では、握力が良好群に比べ概良群で有意に低下していた。後期高齢者では、女性の BMI で有意差がみられた咀嚼能力の低下には、独居、咬合支持がない、義歯の使用状況(未使用あるいは不適合を自覚)が関連していた。	地域自立高齢者の自己評価に基づく咀嚼能力と栄養状態、体力との関係：村田 あゆみ, 守屋 信吾, 小林 國彦, 本多 丘人, 野谷 健治, 原田 江里子, 柏崎 晴彦, 黒江 敏史, 黒嶋 伸一郎, ヌル・モハマド・モンスル・ハッサン , 中川 靖子, 岸屋 雄介, 村松 真澄, 井上 農夫男： 老年歯科医学 (0914-3866)22 巻 3 号 Page309-318(2007.12)	
	村田あゆみ	栄養評価		口腔内診査	日本			2008135381
		自己評価		血液検査				
25		要介護高齢者	要介護入院患者 14 人	介入		口腔ケアと摂食嚥下訓練、義歯の使用による口腔機能の改善によって、経口栄養への移行や摂食量の増加、低栄養状態のリスクの軽減、ADL の改善、CRP 値の改善が得られた。	要介護高齢者に対してのチームアプローチ　口腔機能の向上から栄養状態の改善を目指して：金中 章江, 岩田 宏隆, 大谷 久美, 森本 祥代, 前田 知子, 井本 有香, 塩見 千尋, 長島 義之, 高柴 正悟： 感	
	金中章江	口腔機能		週一回口腔ケア嚥下	日本			2010189299

		栄養		3ヶ月			染防止 (1340-9921)20巻2号 Page14-22(2010.04)	
26		アルブミン				高齢となるに従って残存歯数の低下及び総義歯の頻度の増加を認めた.食事調査では,歯数20本未満への減少に伴い総エネルギー及び三大栄養素の摂取量低下を認め,総義歯となるに従って特に肉類及び魚介類の摂取低下を認めた.	高齢者の咀嚼能力が食事摂取に及ぼす影響ついて：田中 光, 中村 光男, 松本 敦史, 志津野 江里, 松橋 有紀, 柳町 幸, 丹藤 雄介, 小川 吉司, 平野 聖治 ： 老年消化器病 (0914-8590)16巻3号 Page203-208(2004.12)	
	田中光	咀嚼能力			日本			
		総義歯						
27		低栄養		介入 3ヶ月		栄養ケアチームとして、歯科医 歯科衛生士 あるいは言語聴覚士が参画するような栄養ケアが実施された場合には、食事摂取量が徐々に増加するとともに BMIが、優位に上昇した。ケアチームの適否が経口維持による適正栄養補給量の確保ならびに体重の維持によって重要な用件である。栄養専門職も嚥下障害リスクを把握できるようになるとより連携が高まる。	高齢者の経口摂取の維持ならびに栄養ケア・マネジメントの活用に関する研究__摂食・嚥下機能低下者の栄養ケアにおける他職種ケアチームの意義 合田敏尚,杉山みち子、市川陽子、他：高齢者の経口摂取の維持ならびに栄養ケア・マネジメントの活用に関する研究__摂食・嚥下機能低下者の栄養ケアにおける他職種ケアチームの意義__厚生労働科学研究費補助金（長寿科学総合研究事業）分担研究報告書平成23年	
	合田敏尚	摂食嚥下		栄養ケアチーム	日本			厚生労働科研
		栄養ケアマネージメント						

							度（2011 年度）	
28	ピラヤ 洋子	口腔機能	通所リハ 42 名	横断		機能歯数および介護度、HDS-R、食事遂行度(「食事チェック表」)の評価を行い、機能歯数は介護度(p<0.001),HDS-R(p<0.001)および「食事チェック表」全ての項目(p<0.001)との間に有意な相関を示した。	高齢者における機能歯数と心身機能との関係について　介護度、認知機能、食事遂行度との相関より ピラヤ 洋子,岩崎 テル子, 岡村 太郎, 今井 信行 作業療法 26 巻 6 号 Page539-546(2007.12)	
		高齢者	療養病棟入院 36 名	調査（PT）	日本			2008105559
		認知機能		観察				
29	中山富子	介護老人施設	介護老人施設	横断		平均年齢や平均介護度が高い施設に摂食・嚥下障害がある入所者が多い傾向で非経口摂取者も多かった。経口摂取者では、常食を食べている人の割合が少なく、食事摂取	介護老人施設に入所している高齢者の摂食・嚥下機能にかかわる状況と施設の対応(原著論文) 中山 富子, 伊藤 加代子, 井上 誠	2014188232
		高齢者	5 件の施設長	アンケート	日本			

		摂食嚥下障害		インタビュー		量も少ない傾向であり、食事介助を必要とする人数が多かった。入所者の食事摂取への対応で、食事介助や食事時間、食事場所については、看護・介護する職員の高齢者の食に対する思いや考えが反映されている結果であった。摂食・嚥下障害がある入所者に実施しているケアで、「摂食・嚥下訓練」は2施設で実施していたが、いずれも胃瘻入所者への楽しみのための経口摂取であり、摂食・嚥下機能向上のための積極的な訓練は行われていなかった。摂食・嚥下機能の評価は2施設が訪問歯科医師による嚥下内視鏡検査を実施していた。要介護高齢者を多数抱える介護老人施設でさえも、摂食・嚥下障害に対する十分な対策が統一して取られていない現状が捉えられた。	新潟歯学会雑誌 (0385-0153)43巻2号 Page119-127(2013.12)	
30	Kimura Motoshi	口腔状態	地域在住高齢者	横断		修正Eichner指数(EI)でEIと精神状況、身体状況、身体機能の相関を検討。修正EIで3種の口腔状況評価。修正EIは咬合状態の良好な指標であり、男性では生活の満	Occlusal support including that from artificial teeth as an indicator for health promotion among community-dwelling elderly in Japan Kimura	
		精神状態	286例	口腔診査	日本			2014181257

		身体状態		アンケート		足度、TUG 検査、片脚立ちバランス、全HLFC、HLFC-IADL と相関し、女性ではTUG 検査、片脚立ちバランス、HLFC-知的活動と相関がみられた。	Motosh, Watanabe Misuzu, Tanimoto Yoshimi, Kusabiraki Toshiyuki, Komiyama Maki, Hayashida Itsushi, Kono Koichi GGI (1444-1586)13 巻 3 号 Page539-546(2013.07)	
31	岩崎 正則	開眼片足立ち保持時間	地域在住	横断		2 分間の咀嚼によるガムの色変化を 5 段階(スコア 1～5)で評価し、3 群(咀嚼能力が高い群=スコア 5、中間群=スコア 4、低い群=スコア 1～3)とした。 開眼片足立ち 30 秒保持の可否を目的変数とし、現在歯数、年齢、および運動機能を共変量とするロジスティック回帰モデルを用い咀嚼能力と開眼片足立ち保持時間の関連を評価した。 咀嚼能力が低いことは開眼片足立ちが 30 秒間保持できないことと有意に関連していた。	地域在住女性高齢者における咀嚼能力と開眼片足立ち保持時間の関連 ：岩崎 正則, 葭原 明弘, 宮崎 秀夫：口腔衛生学会雑誌 (0023-2831)62 巻 3 号 Page289-295(2012.04)	
		咀嚼能力	65～74 歳女性 138 名	口腔診査	日本			2012304189
		高齢者		体力測定				
32	Sakayori Takaharu	ハイリスク高齢者	地域在住	横断		トレーニングセッションが 2～3 週毎に 5～6 回、3 ヵ月間プログラム前後に、口腔の機能と環境を評価。oral diadochokinesis のスコアより介入の効果を有意に認めた。介	Evaluation of a Japanese "Prevention of Long-term Care" project for the improvement in oral function in the high-risk elderly	2014114846
		地域支援事業	ハイリスク高齢者	介入	日本			

		長期介護の予防	36 名	口腔機能向上プログラム		入前の反復唾液嚥下テスト(RSST)と oral diadochokinesis のスコアが低かった人では、さらに大きく改善する傾向があった。唾液分泌や Streptococcus mutans、Lactobacilli、Candida、総微生物の総量には、有意な変化は認めなかった。	Sakayori Takaharu, Maki Yoshinobu, Hirata SoIchiro, Okada Mahito, Ishii Takuo　G G　I (1444-1586)13 巻 2 号 Page451-457(2013.04)	
33	Semba RD	義歯	研究地域在住	縦断		古い入れ歯を使用して、咀嚼や嚥下が困難であった地域在住高齢女性は栄養不良のリスクが高く虚弱のリスクおよび 5 年死亡率も高い。	Denture use, malnutrition, frailty, and mortality among older women living in the community.J Nutr Health Aging. 2006 Mar-Apr;10(2):161-7. Semba RD1, Blaum CS, Bartali B, Xue QL, Ricks MO, Guralnik JM, Fried LP.	PMID：16554954
		栄養状態			アメリカ			
		フレイル	826 名					
34	Lopez-Jornet Pia	口腔状態	465 名	横断		住民の 7%が「栄養不良」、49%が「栄養不良の危険あり」と判定された。これらの頻度は高齢者および施設入所者で高かった。「栄養不良」または「栄養不良の危険あり」の頻度について、義歯装着者と非装着者との間、および無歯顎者と有歯顎者との間で有意差はなかった	Effect of oral health dental state and risk of malnutrition in elderly people：Lopez-Jornet Pia, Saura-Perez Manuel, Llevat-Espinosa Nieves GGI13 巻 1 号 Page43-49(2013.01)	2014042841
		MNA	65 歳以上		スペイン			
		高齢者						
35		咬筋		横断		栄養失調は対象者のほぼ半数でした。5.8%は、機能性天然歯が揃っていました。栄養状態が良好で、握力も高く、さらに多数残	Masseter muscle tension, chewing ability, and selected parameters of physical fitness in elderly care home	dx.doi.org/10.2147/CIA.S66672
	Gaszynska E	栄養状態	259 名		ポーラン			

					ド	存歯を有する被験者は咬筋厚が大きかった。	residents in Lodz, Poland Gaszynska E, Godala M, Szatko F, Gaszynski TClin Interv Aging. 2014 Jul 22;9:1197-203.	
		握力	介護施設					
36	高田 豊	咀嚼能力（食品数）	80 歳	80-92		咀嚼食品数からみた咀嚼機能が良好なほど長寿であったが、この関係には一部 ADL と BMI が影響していた。現在歯数が多いほど長寿の傾向にあったが、この関係には ADL と喫煙が一部関係していた。80 歳住民という後期高齢者でも、現在歯数を保ち咀嚼機能を維持することが長寿に直接繋がると考えられた	咬合咀嚼は健康長寿にどのように貢献しているのか 咀嚼機能と長寿　80 歳住民での 12 年間コホート研究から：高田 豊, 安細 敏弘：日本補綴歯科学会誌 (1883-4426)4 巻 4 号 Page375-379(2012.10)	
		ADL	782 名	12 年間コホート	日本			2013068182
		BMI						
37		歯数	54 名	6 ヵ月介入		咬合力、嚥下能、非刺激、刺激唾液流量などの全口腔機能の有意な改善が観察された。介入群のうち、有意の改善が 20 本以上の残存歯を有する 17 名で観察された一方、20 本未満の 9 名では改善が認められなかった。	Intervention Study of Exercise Program for Oral Function in Healthy Elderly People：Ibayashi Haruhisa, Fujino Yoshihisa, Pham Truong-Minh, Matsuda Shinya：The Tohoku Journal of Experimental Medicine (0040-8727)215 巻 3 号 Page237-245(2008.07)	
	Ibayashi Haruhisa	口腔機能			日本			2008364291
		唾液						
38		歯科治療	527 名での治療者	評価表		対照群(255 名)では前・後比較で有意差を認めた項目がなし。治療群(277 名)では意識レベル、ヒトの見当識、FIM の食事・更	歯科治療による高齢者の日常生活活動の改善　層別無作為化対照試験：鈴木 美保： 老年歯科医学	
	鈴木 美	日常生活動	RCT	8 週	日本			200813537

	保	作				衣・4 項目合計、歯科医からみた face scale において後調査が有意に改善。口腔機能評価については、治療群で、口腔内の痛みと、口腔乾燥以外の項目に、改善を認めた。両群の前調査と後調査の差の比較では、治療群において、ヒトの見当識、FIM の 4 項目合計、歯科医からみた face scale が有意に改善していた。口腔機能評価では、食べたときの痛み、歯肉の腫れ、咀嚼、上顎義歯着脱自立度、口腔清掃回数、清掃用具、発音の明瞭度に治療群と対照群の差があり、口腔の客観情報については、口腔清掃状態の食物残渣、口臭の改善を認めた。義歯治療に関連しては、部分床義歯の場合に ADL 改善が大きかった。	(0914-3866)22 巻 3 号 Page265-279(2007.12)	7
		口腔機能	対象 532					
39		機能的口腔ケア	要介護高齢者 138 例	6 ヵ月介入		集団訓練による機能的口腔ケアを継続的に行い,その効果を検討した.1 群を口腔ケア群とし,歯科衛生士による機能的口腔ケア週 1 回介護職員ケアを週 1 回,6 ヵ月間　対照群とし日常のケア施行。集団訓練による機能的口腔ケアの介入を行うことで最大舌圧が増加し,摂取食物形態の改善に寄与する効果を認めた	機能的口腔ケアが要介護高齢者の舌機能に与える効果：菊谷 武, 田村 文誉, 須田 牧夫, 萱中 寿恵, 西脇 恵子, 伊野 透子, 吉田 光由, 林 亮, 津賀 一弘, 赤川 安正, 足立 三枝子, 米山 武義, 伊藤 英俊, 大石 暢彦, 稲葉 繁：老年歯科医学 (0914-3866)19 巻 4 号 Page300-	
	菊谷武	舌圧			日本			2005189647

							306(2005.03)	
40		介護予防標準プログラム	虚弱高齢者	介入 8 か月		RSST を除く各口腔機能評価項目において、有意に口腔機能向上がみられた。虚弱高齢者において、口唇閉鎖機能および舌機能が向上し、構音機能を主とした口腔機能が改善したことから、摂食嚥下機能が改善したことが示唆された。口腔衛生状況に関しては、義歯あるいは歯の汚れおよび舌苔は、有意に改善されたが、口腔清掃回数には有意な改善はみられなかった。	大阪府介護予防標準プログラムにおける口腔機能向上の効果(第 2 報)　口腔機能および口腔衛生状況の変化 貴島 真佐子, 糸田 昌隆, 伊藤 美季子, 田中 信之： 日本口腔ケア学会雑誌 (1881-9141)3 巻 1 号 Page37-43(2009.03)	
	貴島 真佐子	食事能力アセスメント	41 名	縦断	日本			2009217781
		健口体操		週一　三か月				
41	Yasunori Sumi	口腔機能	要介護高齢者	横断		水飲み、ガーグリングは、認知機能と ADL　BMI 相関を示し、水飲みアルブミンレベルと相関を示しました。口腔機能は密接に認知機能、ADL、および栄養状態に関連している。	Relationship between oral function and general condition among Japanese nursing home residents. Sumi Y1, Miura H, Nagaya M, Nagaosa S, Umemura O. Arch Gerontol Geriatr. 2009 Jan-Feb;48(1):100-5. Epub 2007 Dec 21	PMID: 18096255
		認知機能	79 人					
		栄養状態	82.2 歳					
42	冨田美穂子	咬合	咀嚼機能が正常ではない 29	介入		補綴処置による咬合の改善が物事に対する意欲, 集中力を高めたといえ, 前頭葉機能が向上することがわかった。さらに, 年齢	咬合改善による前頭葉機能の回復 富田 美穂子, 江崎 友紀 老年歯科医学 18 巻 3 号 Page199-	
		痴呆		縦断	日本			2004158529

		前頭葉機能	名			別の得点の相違から若年期の欠損歯の放置は高齢者に比べ脳機能に対しての影響力が強いことが示唆された。	204(2003.12)	
43	森野智子	認知機能	施設在住要介護	調査		認知機能、口腔機能・状態の関連性を、1年間継続調査した。認知機能(MMSE)に一番影響を与えているのは食事の自立度(DFIM)であった。対象施設はＤＨ常勤でいるため、義歯継続使用率が高い	施設在住要介護高齢者における口腔機能・状態と認知機能との関連 森野 智子, 春田 直子 日本歯科衛生学会雑誌 (1884-5193)4 巻 2 号 Page53-58(2010.02)	
		口腔機能	104 名	縦断	日本			2010122176
		口腔状態						
44	Kimura Yumi	認知機能	地域在住高齢者	口腔調査		咀嚼能と包括的老年期機能および摂食状況の相関の検討。歯の数は咀嚼能と有意な相関。咀嚼能低下高齢者は、自己メンテナンス項目と知的活動項目の ADL スコアが有意に低い。咀嚼能低下とうつ病には有意な相関が認められた。認知機能低下は咀嚼能低下と有意に相関していた。咀嚼能低下例では食品の多様性が低下。	Evaluation of chewing ability and its relationship with activities of daily living, depression, cognitive status and food intake in the community-dwelling elderlyKimura Yumi, Ogawa Hiroshi, Yoshihara Akihiro, Yamaga Takayuki, Takiguchi Tomoya, Wada Taizo, Sakamoto Ryota, Ishimoto Yasuko, Fukutomi Eriko, Chen Wenling, Fujisawa Michiko, Okumiya Kiyohito, Otsuka Kuniaki, Miyazaki Hideo, Matsubayashi Kozo GGI (1444-1586)13 巻 3 号	
		咀嚼能	75 歳以上 269 例	横断	日本			201418128
		摂食状況		アンケート				

							Page718-725(2013.07)	
45	寺岡加代	意欲	要介護高齢者	口腔調査		意欲に関連する因子は、軽中等度の要介護高齢者では簡易機能歯ユニット、食事の自立度であり、重度の要介護高齢者では改定水飲みテスト、認知機能であった。したがって、要介護高齢者の意欲には、口腔機能の指標である臼歯部の咬合支持や嚥下機能が関連することが示唆された。	施設在住要介護高齢者の意欲(Vitality Index)と口腔機能との関連性について：寺岡 加代, 森野 智子： 老年歯科医学 (0914-3866)24巻1号 Page28-36(2009.06)	
		咀嚼	140名	横断	日本			2009261677
		嚥下機能	施設在住	認知機能				
46	加藤友紀	知識得点	中高年者2024人男性1031名　女性９９３名４０-８１歳	縦断	日本	プロリンは、動物性と植物性で知識得点に与える影響が異なり、体内での利用効率や動態が異なる。男女ともに中年者では動物性プロリンを多く摂取すると知識の獲得および維持に有効であり、さらに、女性では高齢でも動物性食品よりプロリンを多く摂取することにより高い得点を維持していた。	地域在住中高年者のプロリン摂取量が知能に及ぼす影響に関する縦断的研究　：加藤友紀、大塚礼、西田裕紀子他： 日本未病システム学会雑誌 (1347-5541)20巻1号 Page99-104(2014.0 3)	2015048615
		プロリン						
		タンパク質						
47	橋元千久佐	食欲	新潟市内７０歳全員	横断	日本	食欲のある者は、家族や友人との交流に満足しており、日常的な健康観が高かった。咀嚼不自由感のない者は、現在歯数は多	地域在住高齢者における食欲および咀嚼不自由感と関連要因に関する研究：橋本千久佐、葭原 明弘,	2014241256
		咀嚼		アンケート				

		生きがい				く、口腔の自覚症状がなく、家族や友人との交流に満足していた。食欲や咀嚼不自由感は、現在歯数や口腔の自覚症状に加え、家族や友人との交流等の社会的要因や主観的な日常的健康観との関連が示唆された。	宮崎 秀夫：口腔衛生学会雑誌(0023-2831)64 巻 3 号 Page284-290(2014.04)	
48		自立高齢者		縦断	日本	自宅自立 70 歳以上の男女 11 名に栄養飲料(エネルギーと蛋白質・カルシウム・ビタミン D 添加)を 2 ヵ月間飲用の前後を測定した。ほとんどの栄養素の摂取量が有意に増加した上、体重が有意に増加した。また、血中 25-OH ビタミン D 濃度が有意に増加し、骨量減少が抑制された。	栄養飲料摂取が地域在住の元気高齢者の栄養素摂取量および身体組成、血液生化学検査値に及ぼす影響：久野　一恵、甲斐 敬子, 辻 雅子他：薬理と治療 (0386-3603)42 巻 4 号 Page281-287(2014.04)	2014227645
	久野一恵	栄養摂取	７０歳男女１１名	介入				
		タンパク質						
49		高齢者	西宮在住在宅高齢女性２０２名７６．３±8.2 歳	横断	日本	CZR（血清銅/亜鉛比）は年齢、高感度 CRP、TNF-α と正相関しており、握力、血清アルブミンと逆相関していた。年齢で補正後、CZR は白血球数と有意に相関し、握力、アルブミン、CRP、TNF-α とも有意に相関がみられた。地域在住の高齢日本人女性において、CZR は CRP 高値および握力低下と独立して関連しており、CZR 高値は軽度炎症、低血清アルブミン、握力低下などの CVD の危険因子と関連することが示された。	Association of serum copper/ zinc ratio with low-grade inflammation and low handgrip strength in elderly women：Ayaka Tsuboi, Mayu Watanabe, Tsutomu Kazumi, Keisuke Fukuo1：Biomedical Research on Trace ElementsVol. 24 (2013) No. 3 p. 163-169	2014215977
	AYAKA　TSUBOI							

50	中山 佳美	発熱	介護保険施設 454 人	横断		口腔ケアのレベルで二群　低レベル施設群を 200 人、口腔ケア高レベル施設群を 254 人 発熱発症に関連した要因は、食事形態が経管栄養(胃ろうを含む)、軟食(きざみ食、ソフト食等)および肺炎球菌ワクチンの接種であった。肺炎発症に関連した要因は、年齢が 91 歳以上、BMI が 18.5 未満、悪性腫瘍の既往がある。肺炎球菌ワクチンの接種、食事形態が経管栄養(胃ろうを含む)であった。	介護保険施設入所者における発熱および肺炎発症の関連要因について 中山 佳美(北海道苫小牧保健所), 森 満 口腔衛生学会雑誌(0023-2831)63 巻 3 号 Page249-257(2013.04)	2013243179
		要介護			日本			
51	桑澤実希	肺炎　気道感染	特養 114 名老健入居者 122 名の合計 236 名	縦断		236 名中 35 名に誤嚥性肺炎・気道感染症の発症。多重ロジスティック回帰分析の結果、「低 ADL(BI 20 点以下)」、「Alb 3.0g/dl 以下」、「舌運動範囲不十分」、「食形態の軟食傾向」で危嚥性肺炎・気道感染症発症の関連要因を示唆。発症率の高かった特養では、9 項目(「低 ADL(BI 20 点以下)」、「意思疎通不可能」、「歯磨き拒否あり」、「開口保持困難」、「RSST 2 回以下」、「口唇閉鎖能力不十分」、「舌運動能力不十分」、「うがい不可能」、「食形態の軟食傾向」)の全てで有意に多かった。	施設における誤嚥性肺炎・気道感染症発症の関連要因の検討 桑澤 実希, 米山 武義, 佐藤 裕二, 北川 昇, 今井 智子, 山口 麻子, 竹内 沙和子 Dental Medicine Research(1882-0719)31 巻 1 号 Page7-15(2011.03)	2011336722
		口腔状態		3 か月後再調査	日本			
		口腔機能						

52	森崎 直子	日和見感染	介護老人保健施設6施設	横断		口腔内日和見感染微生物の保有状況は、残存歯と補綴状況に関連がある一方、口腔内日和見感染微生物の検出状況と、施設での口腔清掃の実施状況との間には、直接的な関連性は認められなかった。	介護老人保健施設入所要介護高齢者における口腔内日和見感染微生物の検出とその関連要因の検討 森崎 直子, 三浦 宏子 老年歯科医学(0914-3866)25巻3号 Page289-296(2010.12)	2011136782
		肺炎	65歳以上要介護高齢者	インタビュー	日本			
		義歯	150名	細菌検査				
53	三浦 宏子	発熱	介護老人施設	横断		自己評価では「硬い食物の咀嚼困難」介護者による評価では「発熱」が高率に認められた.他者,ならびに自己評価で一致度が高かったものは「この1年間の肺炎の既往」であった.一致度が低かったものは「食欲の低下」であった.基本ADLが低下している者では摂食・嚥下障害のリスクが高い	虚弱老人における摂食・嚥下障害に関するケアアセスメント：三浦 宏子, 苅安 誠, 山崎 きよ子, 荒井 由美子：日本老年医学会雑誌(0300-9173)41巻2号 Page217-222(2004.03)	2004199255
		口腔ケア	65歳以上	アセスメント調査	日本			
		摂食嚥下	９２名	自己評価				
54	Thomas E Dorner	Frailty; Community-dwelling; Malnutrition	80人　地域在住虚弱高齢者	介入　栄養、運動	オーストリア	研究プロトコール約1時間、1週間に2回栄養失調の虚弱高齢者を訪問　週2回の集団での筋力トレーニング　栄養指導	Nutritional intervention and physical training in malnourished frail community-dwelling elderly persons carried out by trained lay "buddies": study protocol of a randomized controlled trial. : Dorner TE, Lackinger C, Haider S1, Luger E, Kapan A, Luger M,	PMID: 24369785
				縦断				

							Schindler KE. ：BMC Public Health. 2013 Dec 27;13:1232. , Christian Lackinger , Sandra Haider, Eva Luger , Ali Kapan , Maria Luger, Karin E SchindlerNutritional intervention and physical training in malnourished frail community-dwelling elderly persons carried out by trained lay “buddies”：study protocol of a randomized controlled trial,BMC Public Health. 2013 Dec 27;13:1232.	
55	百瀬 由美子	口腔機能向上サービス 虚弱高齢者	1044 事業所	横断 アンケート	日本	口腔機能向上サービスのニーズを有する利用者や通常の口腔ケアの実施は多いものの,口腔機能向上の算定はわずかで算定しない理由は,高齢者・家族の口腔機能向上に対す	通所介護事業所における虚弱高齢者の口腔機能向上サービスに関するニーズと職員の認識,百瀬 由美子, 藤野 あゆみ, 天木 伸子, 山根	2013208967

		サービスニーズ				る認識が低い,職員のケアに対する自信が低い,算定基準が厳しいことなどであった. 口腔機能向上サービスの促進と成果を高めるには,職員への教育の充実を図る重要性が示唆された.	友絵, 田中 和奈, 鎌倉 やよい,愛知県立大学看護学部紀要 18 巻 Page63-69(2012.12)	
56	東口 みづか	アルブミン	70 歳以上	コホート		介護保険認定および死亡リスクは、血清アルブミン値 3.5g/dL から 4.0g/dL の基準値すべてで有意に上昇した。該当率および感度、特異度の点から、血清アルブミン値 3.8g/dL を基準値とすることの妥当性が示唆された。	低栄養と介護保険認定・死亡リスクに関するコホート研究　鶴ヶ谷プロジェクト：東口 みづか, 中谷 直樹, 大森 芳, 島津 太一, 曽根 稔雅, 寳澤 篤, 栗山 進一, 辻 一郎：日本公衆衛生雑誌 (0546-1766)55 巻 7 号 Page433-439(2008.07)	2008304554
		低栄養	832 人	前向き 3 年	日本			
		死亡リスク						
57		虚弱	65 歳以上	介入		食物摂取量調査の結果、プログラム開始時に比べて終了時には男性で[蛋白質][脂質][カルシウム]の平均摂取量が有意に増加し、女性で[食物繊維][カルシウム][鉄][カリウム][ビタミン A]の平均摂取量が有意に増加していた。	在宅虚弱高齢者の栄養改善プログラムの検討：久喜 美知子, 新野 直明：老年学雑誌 (2185-9728)2 号 Page15-30(2012.03)	
	久喜 美知子	栄養改善プログラム	42 名	縦断	日本			2013285829
			対照 68 名	6 ヵ月				
58	安藤雄一	栄養摂取量	4450 人	横断	日本	平成 17 年国民生活基礎調査とリンケージした国民栄養調査データによる解析では食	歯の保有状況と食品群　栄養素の摂取量との関連その 2 平成 17 年	